

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	皇統譜はいかに創られたか：天武の構想・安萬侶の試み
Sub Title	
Author	田島, けい子(Tajima, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1993
Jtitle	三田國文 No.18 (1993. 6) ,p.1- 24
JaLC DOI	10.14991/002.19930600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19930600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

皇統譜はいかに創られたか

——天武の構想・安萬侶の試み——

田島けい子

- 序
- 第一章 天武の主幹系譜と迎具漏比売
- 第二章 有力氏と天皇家の関係
- 1 物部氏と和邇氏
- 2 大伴氏の覇権
- 3 仁賢天皇の成立
- 4 継体朝の実像
- 5 蘇我氏から息長氏へ
- 第三章 皇統譜はいかに創られたか
- 1 允恭の周辺
- 2 応神の創生
- 3 穗穗出見尊から神武天皇へ
- 結び

序

『古事記』の皇統譜に登場する人々の関係には、時々理解の難しいことがある。何よりもまず世代的に掛け離れた人と人が夫婦であったり（例えば孝靈六代孫景行と三代孫伊那毘大郎女、実際の人名が明記されている総数より多かつたり少なかつたりする。それらは、単なる手違いによるものだったのか。どうもそうではないらしい。今まで何度か試行論文²を發表するうち、その確信がますます強まってきたのだ。

『古事記』の系譜の幾つかの矛盾を解く鍵は、その矛盾そのものの中に隠れているらしい。また『古事記』及び『日本書紀』のように中央で作成したものと、ローカルな各風土記に載った記事との矛盾の中にも、その鍵は存在する。そしてその鍵で、現在残っている『古事記』の扉を開いてみると、そこに前『古事記』あるいは原『古事記』とも言うべきものの輪郭が仄かに見えてくる。さらに天武の意図を探っていくと、彼の構想力というか、むしろ壮大な空想力と言った方がふさわしいような、文学的な空間が展開していることが分かる。しかも時折、その天武の意思に逆らうようなある種の手触りも残っていて、これはあるいは筆録した多安萬侶の意思ではなかったかと思えるのである。水脈下で僅かにぶつかりあっている二人の意思の相剋が、皇統譜の矛盾点となって表面に現われていると思われる。

『古事記』は優れた文学作品であるが、また『歴史』への架け橋ともなるドキュメンタルな書物であり、天武天皇という希有な存在に迫り得る有力な資料でもある。天武の意図の出発点はどこにあったのか。その立場を把握するために、彼の近い過去

の時代を主として『日本書紀』の記事を中心に読み込むことで、要約してみた(第二章)。そして『古事記』の矛盾点や他の資料を比較分析して、何から何が引き出されていったのか即ち『古事記』の「構想」についての推理を試みた。(第一章・第三章)

第一章 天武の主幹系譜と迦具漏比売

『古事記』の表す系譜の中で最大の疑問は、迦具漏比売に纏わるものである。彼女の名は、「景行記」の中の帝紀と倭建命系譜の二ヶ所の他に「仲哀記」及び「応神記」の計四ヶ所に登場する。その登場の頻度は『古事記』中で目立って多い。そして彼女の係累を統合すると、迦具漏比売とは、景行の子倭建命の曾孫でありながら、景行の妃であり、また景行の曾孫応神の妃でもあるという。これについて大系本頭注は「景行天皇がその御子倭建命の曾孫を娶られるということはあり得ないことで、これは何かの理由で系譜が乱れたものと思われる」とする。しかし、このように誤謬を積み上げる形で、なおも迦具漏比売の名が繰り返し紹介されたのは、いかにも特異である。何の挿話も持たない迦具漏比売にこれ程執着したのはなぜなのだろうか。その答は只一つしかない。即ち『古事記』の潜在的な基幹系譜に於いて、彼女の名が欠くことのできない位置を占めているからである。

『古事記』の潜在的な基幹系譜とは何か。勿論『古事記』撰定を行った天武天皇の系譜である。天武の父舒明はその名も息長帯広額天皇と号する、文字通り息長氏の出身であった。その息長氏の古系譜の最も高貴なものとして、代俣長日子王の系譜

があった。

即ち、代俣長日子王の系譜は、応神・允恭・雄略・仁賢・継体・欽明・敏達・舒明・天武及び倭建命や景行等皇室と深く結び付いている。(II図・5頁)

代俣長日子王の女飯野真黒比売が倭建命の男と結婚して、その孫女が迦具漏比売である。また代俣長日子王のもう一人の女息長真若比売の子孫が、允恭妃忍坂大中比売や継体の曾祖父の大郎子であり、その系図は欽明を経て天武まで続く。

この皇室と深い関わりを持つ系譜の最大の欠点は、「景行天皇がその御子倭建命の曾孫を娶られるということはあり得ない」ということである。しかし、ここで迦具漏比売の祖先の倭建命を「景行の御子」という言葉から切り離すならば、つまり景行の子小碓命とは異なる時代の異なる人物として捉え直してみるならば、この系譜の乱れは氷解する。

『古事記』の小碓命は、皇太子であったが早世した。しかし、倭建命が天皇であったという伝承が、かつて存在していたらしい。その片鱗は今は『常陸風土記』の中の十二カ所の断片的な記録の中にしか残っていない。しかし、それらの記録を片方において『古事記』を読むならば、『古事記』の中にも天皇としての倭建命の痕跡を見出すことができる。景行記に詳しく記される倭建命系譜等もその一つである。そして『古事記』の系譜の矛盾とりわけ迦具漏比売系譜の矛盾を解く第一の鍵は、この倭建命だと考えられる。

さて『常陸風土記』に興味深い一人の人物がいる。

〔古老のいへらく。昔、美麻貴の天皇(崇神)の馭(あめのしたし)宇

しめししみ世、東の夷の荒ぶる賊を平討たむとして、新治の国造が祖、名は比奈良珠命といふものを遣はしき。

〔あるひといへらく。倭武の天皇、東の夷の國を巡狩はして新治の縣を幸過しし時國造比奈良珠命を遣はして、新に井を掘らしむるに流泉淨く澄み、尤好愛しかりき

即ち、新治の國造比奈良珠命は崇神朝に仕え、また倭武天皇に仕えたとする伝承を持つ。それも各々国名郡名の起源伝説と結びついており、風土記の重要なポイントである。

この伝承から測るに、比奈良珠命という一人物の生涯に崇神朝も倭武天皇の時代も係わっているわけだから、二つの王朝は極めて近接していたことになる。

さらに『常陸風土記』には、もう一人注目すべき人物がいる。古老のいへらく。斯貴の瑞垣の宮に大八州所馭しめしし天皇(崇神)のみ世、東の垂の荒ぶる賊を平けむとして、建借間命を遣しき。即ち此は那賀の國造が初祖なり

(『常陸國風土記』)

仲國造一志賀高穴穗朝御世(成務)。伊予國造同建借馬命、定賜國造。

(『國造本紀』)

この二資料によれば、那珂(仲)國造祖となった、多臣の一族建借間命(建借馬命)は、崇神朝にも成務朝にも一壯年として活躍していたことになる。しかし現存の記紀の系譜ではこの二朝の間には、垂仁朝と景行朝とがある。この二代においては彼はどうしていたのか。その消息はどこにも残っていない。これは『古事記』における建内宿禰と全く同じ現象である。

孝元記によれば、建内宿禰の父比古布都押信命と崇神とは、物部氏祖伊迦賀色許賣命を母とする異母兄弟である。だから、建内宿禰は少なくとも崇神の代には天皇の甥として生まれていたのであろうし、垂仁朝乃至景行朝には成人しているはずである。しかし、建内宿禰の名は成務記において初めて登場するのである。

建内宿禰を大臣と為て大國小國の國造を定め賜ひ、亦國國の堺及大縣小縣の縣主を定め賜ひき

建内宿禰は、崇神朝から成務朝にかけて展開する人生を送ったはずなのに、その間の垂仁記・景行記には名も姿も片鱗さえ見ることができない。これはどうしたことか。特に『紀』では、彼は成務と同月同日に誕生したという。

このように比奈良珠命も建借間命も建内宿禰も、その人生の構造には共通したものがある。つまり崇神の代と成務乃至倭建命の代に跨がって働き盛りであり、しかも垂仁と景行の時代の記録が欠落している。

これらの例を偶然とか誤謬と片づけることもできる。しかし記紀の皇統譜を洗い直す立場から見れば、これらの例から導き出されるのは、次の一点である。即ち、崇神朝の直後には成務朝乃至は倭武天皇の御代があったという共通の心理である。

この「共通の心理」の例をもうひとつ挙げる。記紀ともに景行の正妃と伝える印南別嬢(伊那毘大郎女)の主な資料である『播磨風土記』に、次の記事がある。

郡の南の海中に小嶋あり。名を南枇都麻といふ。滋賀の高穴穗の宮に御宇しめし天皇の御世、丸部臣等が始祖比古汝

茅を遣りて國の堺を定めたまひき。その時吉備比古・吉備比賣二人参迎へき。ここに比古汝茅、吉備比賣に娶ひて生める児、印南の別嬢、此の女の端正しきこと、當時に秀れたりき。その時、大帯日古の天皇、この女に娶はむと欲して、下り幸行しき。別嬢聞きて、即ち件の嶋に遁げ度りて隠び居りき。故、南毗都麻といふ。

この記事について大系本頭注は「景行天皇がその次代成務朝の人の女を妻訪ひして皇后とされるのは、伝承上の時代錯誤である」とする。しかし、前述したように、崇神朝の後に成務朝乃至倭武天皇の代が在ったとするなら、印南別嬢の素性はまさしく整合性を持つ。

倭武天皇 迎具漏比売

崇神

成務

景行

比古汝茅

印南別嬢

建借馬命

同時に、迎具漏比売の祖先の倭建命を、景行の子小碓命から解放して、景行の正妃の父が仕えた成務と同時代に比定される倭武天皇に置き換えるならば、迎具漏比売と景行天皇の結婚は全く無理のないものとなる。例えば十代前半の少女迎具漏比売が、自分の祖父と同年輩の五十代の天皇に召されることは、充分可能と言えるだろう。

『播磨風土記』の記事は、(伝承上の時代錯誤)としてかたづけられるのではなく、そこにこそ風土記編纂の時代の本質的意識構造を見るべきではないか。即ちそれは崇神の次が成務乃至倭武

天皇の時代であったとする「共通の心理」の一環を成すものであった。又それが『常陸風土記』や『国造本紀』のような外部資料によつてのみ証明されるのではなく、他ならぬ『古事記』の中に、それと呼応する心理が存在することが重要なのである。今まで、「成務乃至倭武天皇」の時代というように、二人を込みにして述べてきたが、ここで興味深い事柄を指摘しておこう。成務と倭建命の妻子の名が極めて相似している。

穗積建忍山垂根—弟 財郎女 和詞奴氣王	穗積押山宿禰—弟 橘比売 若建王
成務 (記)	倭建命 (紀)

このような人脈の相似は、彼らが単に同時代人であつただけではなく、同一人物の可能性さえ示す。事実彼らは同一人物の異なる伝承ではなかつただろうか。

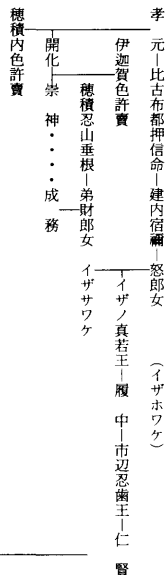
若帯日子命(成務)は建内宿禰とペアであり、物部氏穗積氏の系譜に伝えられている。(I図)

建内宿禰が成務朝で大臣となり得たのは、彼が崇神の甥であるだけでなく、成務の後宮と同じ穗積氏の流れを引いていたからでもあろう(建内宿禰の母は穗積氏内色許男の女。言い換えれば、成務はその背景から見ても、穗積氏内色許賣の子崇神の後継者として、相応しい条件を満たす天皇だったということである。

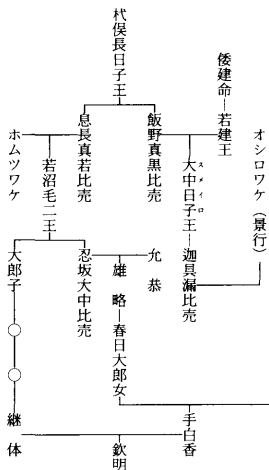
倭建命の方は、杵俣長日古王即ち息長氏系譜と組合わさっている。(II図)

そして、このI図とII図の系譜が、現『古事記』の深奥に潜在する最古の系譜なのである。

〔I 図〕



〔II 図〕



この二種の古系譜を基幹として、特に天武の主幹系譜である(II 図)の正統性と権威づけのために、天武は現記紀に見られる一系の皇統譜を創り出していった。では主幹となる息長氏に属さないホムツツケ・允恭・大帯日子命(景行)等を補足説明する系譜を、天武はどこに求めたのだろうか。天武が手にした諸氏の系図や伝承は、何を語っていたのか。

次の章では、主として『紀』から当時の権力者の諸関係を、類推してみることとする。

第二章 有力氏と天皇家の関係

1 物部氏と和邇氏

履中・反正と、允恭の兄とされる二天皇崩御の後に、允恭自身は強いためらいを示したものの、后忍坂大中比売を筆頭とする群臣の強い要請によって即位した。

この時、允恭のライバルは、異母弟とされる大草香皇子であった。彼の正妃は履中皇女中磯皇女であり、皇統としては、允恭よりもむしろ高い地位にあったはずである。しかし群臣があえて允恭を立てたのは、彼らの本命が実は履中の皇子、幼い市邊押羽皇子であったからではないだろうか。群卿、特に平群氏・物部氏の二大豪族の意向だったと思う。

「履中紀」に言う。住吉仲皇子の謀叛の時、平群木兎宿禰・物部大前宿禰・漢直祖阿知使主の三人が、履中を擁して石上神宮に立て籠もった。また割注として「一に云はく、大前宿禰、太子を抱きまつりて馬に乗せまつれりといふ」とある。物部氏単独の功とされる程であるから、その後の履中の朝廷での物部氏の発言力は極めて大きかったと思う。

履中の在位は六年しかなかったから、後継者の市邊押羽皇子はあまりに幼かった。そこで履中の弟反正が、中継ぎの天皇として立てられたのであろう。反正の立場の弱さは、彼の後宮の記載によって伺える。反正の妃は、『紀』には大宅臣が祖木事(津野媛)と妹の弟媛とであり、『記』には「丸邇之許暮登臣女都怒郎女とその弟比売」とある。大宅臣は丸邇氏の流れであるから、『記』『紀』の記すところは一致する。履中の正妃は葛城

氏系の葦田宿禰女黒媛で、皇妃と記されるが、反正の正妃は皇夫人と記載されており、この辺り、仁徳の正妃を皇后とするのと、微妙に書き分けている。そして反正の妻達が丸邇氏の姉妹しか記録されず、また皇后にはなれなかったことは、反正の立場を暗示する。

大宅臣木事とは、『姓氏録』大和皇別布留宿禰の項に「天足彦國押人命七世孫、米餅搗大使主命男木事命」とあるのと同じ人である。又同物部首の項に「孝昭皇子天足彦國押人命七世孫木事命の子市川臣が仁徳の代に石上御布留村高庭に祭られる布都主神社の神主として奉仕」とあり、さらに垂仁紀割注には五十瓊敷命が神の託宣により、石上神宮を「春日臣の族名は市河に命せて治めしむ。是、今の物部首が始祖なり」とあって、いづれも石上神宮の祭祀との関係を語る。元禄年間にできた『石上大明神縁起』によれば、フツノ御魂やフツヌシノミタマ神、フルノミタマ神、ウマシマザなど物部氏由縁の祭神と共に、木事命も合祀しているという。垂仁紀本文には、五十瓊敷命が神宮の管理を物部十千根大連に委ねたと記されているから、石上神宮の祭祀は物部氏に属するはずである。この祭祀の伝承の二重性について、津田左右吉氏や松前健氏は、「石上の地に土着の豪族はその地名を氏の名として冒していたことが、一般の慣例によって推測される」から、「布留宿禰は土着の豪族で、石上神宮との関係も古くからあったにちがいない」、「石上神宮にあって物部大連の統属下に置かれたら、物部を名乗るようになったのであろう」とされる。

つまり、朝廷から石上神宮の管理を託された物部氏は、石上

神宮の直接の祭司である布留宿禰の、上部団体として君臨していたことになる。『旧事紀』天孫本紀に、物部伊弉弗が履中・反正の二天皇の御代に「大連として神宮の斎を奉じた」とある。この線で考えれば、物部伊弉弗大連の後援があつて、初めて木事臣の婿である反正が、天皇として立てられたことになる。むしろ物部氏の誘導だつたと思われるのである。

反正の在位も短く、僅かに五年であつた。市邊押羽皇子は未だ幼い。物部氏を中心とする親市邊押羽皇子派は、次なる中継ぎの天皇として、より立場の劣ると思われる允恭を支持したのではないだろうか。大草香皇子の正妃は履中の皇女であるから、皇后位を約束されている。彼らの子肩輪王は、最も皇位に近い存在となる。それは大草香皇子の母方に当たる日向勢力の台頭を許し、市邊押羽皇子を擁する物部派の力を削ぐであろう。そう物部氏は判断したのでだ。

允恭の死後、その太子は暴虐淫乱とされて「群臣従へまつらず。悉に穴穗皇子に隸きぬ」という事態となつた。軽太子は物部大前宿禰の家に匿れたものの、大前宿禰は太子をその弟穴穗皇子に引き渡す。一説には太子は「自ら大前宿禰の家に死せましぬ」という。

穴穗皇子は大草香皇子を殺し、その正妃中磯皇女を自分の皇后とする。允恭の子供の世代になつても履中の威光が未だ輝けるものであつたことを、これは示している。穴穗皇子は即位三年目の秋に肩輪王に殺され、その肩輪王は雄略に殺される。そして雄略はついに市邊押羽皇子をも暗殺するのであるが、その動機を『紀』は、「天皇（雄略）、穴穗天皇の會、市邊押羽皇子

を以て國を傳へて遙に後事を付に囁けむと欲ししを恨みて」と伝える。穴穗皇子が兄輕太子から皇位を奪い得たのは、物部大前宿禰の同意があつたからである。穴穗天皇は都を石上に遷した。そして履中の皇女を皇后とし、履中の皇子を後継者に指名する密約のもとに、全面的に物部氏との連携によつて、皇位を保持しようとした。

ところが、雄略天皇の場合は全く立場を異にする。雄略は肩輪王や市邊押羽皇子ら皇位繼承権を持つ別系統の皇子達のみならず、自分の同腹の兄弟達さえ血祭りに挙げて即位した。彼は皇位篡奪者であつて、物部氏の傀儡ではない。雄略は大草香皇子の妹草香媛皇女を皇后として迎え、むしろ日向の勢力と連携したようである。雄略は秦氏を保護し、少子部連に命じて吾田隼人を以て全国に散逸していた秦氏の民を集合統一せしめたと姓氏録にある。また雄略崩御の折「隼人晝夜、陵の側に哀號ぶ。食を與へども喫はず。七日にして死ぬ。有司、墓を陵の北に造りて、禮を以て葬す」と記された隼人とは、雄略近習の、つまり親衛隊であつたのであろう。雄略のいわば私兵が、これら日向の隼人等であつたようである。

但し物部氏の實力は無視できるようなものではなかつた。また物部氏の方も、市邊押羽皇子が暗殺されると、たちまち方向を転換して、雄略を受け入れたのである。雄略天皇と物部氏との全面衝突が避けられたことは、兩者にとつて幸運であつた。雄略の朝廷で、物部連目（伊呂弗の男）は大伴連室屋と共に大連の地位を確保する。大臣は平群木兎宿禰の子真鳥である。大連の物部目は後宮に女を納れることはできなかつたが、次善の

策をとつた。春日丸邇臣深目の女童女君が、一夜雄略に召されて女子を生んだ。春日大郎女と名付けられたその子を、雄略は疑つた。大連は擁護し、ついに女子を皇女としてその母を妃として認めさせた。その認知は天皇が大連に命じて行われたから、つまり大連は春日大郎女の後見人となつたのである。これは彼の父が反正の皇夫人の後楯であつたのと同じ状況であり、物部氏と丸邇氏との独特の紐帯を、ここに確認できよう。この皇女は後に仁賢の皇后となつたから、これは物部氏にとつてさらに重要な繋がりであつた。

2 大伴氏の覇權

允恭の代に、初めて歴史に登場する大伴連室屋は、雄略の時代について大連となる。大連の称号を獲得したのは、大伴氏は室屋が最初であり、従つて大伴氏の家の歴史の中で大伴氏の榮光と強く結び付いた天皇として雄略は特別な存在であつた。後世の大伴家持が萬葉集の巻頭に雄略の聖婚の歌を置いたのは、決して偶然ではなかつたのである。

雄略は臨終の際に、室屋と東漢掬直とに「星川王、心に悖惡を懷きて、行、友、干に闕けり。（略）皇太子、地、儲君上嗣に居りて、仁、孝、著れ聞こえたり。其の行業を以、すに、朕が志を成すに堪へたり。此を以て共に天下を治めば、朕瞑目ぬと雖も、何ぞ復恨むる所あらむ」と遺詔したという。雄略が大伴氏に向かつて、真実皇太子と「共に天下を治めよ」と述べたかどうかは疑問であるが、皇太子の母方の祖父葛城大臣は、肩輪王に殉じて自決しており、外戚を失つた皇太子の後見は、内々大伴氏に委ねられていたのかもしれない。

吉備稚媛とその子星川皇子は、室屋らによつて燔殺された。吉備上道臣は彼らを救おうとして（船師四十艘を率て海に來浮かぶ）が、（既に燔殺されぬと聞きて、海より歸る）

しかも、上道臣等は天皇に責讓られ、其の領する山部を没収されてしまふ。

〔冬十月己巳の朔壬申に、大伴室屋大連、臣連等を率て、璽を皇太子に奉る〕という「紀」の記事からは、大伴氏の得意の姿が彷彿としてくるではないか。

こうして大伴室屋のイニシアチブによつて清寧が即位したことは、重要なポイントである。もう一つ、室屋の選択の動機として雄略の遺詔の他に、次のことにも注意したい。

雄略九年三月に、紀小弓宿禰は新羅征伐を命じられ、室屋を通じて天皇に「敬みて勅を奉る。但し今臣が婦、命過りたる際なり。能く臣を相養る者莫し」と奏したところ、吉備上道采女大海を賜り、新羅に出兵する。しかし、その地で戦病死する。大海は夫の喪の為に日本に帰国し、室屋に「妾、葬むる所を知らず。願はくは良き地を占めたまへ」と頼み、大連は天皇に奏して「視葬者を充てむ。又汝大伴卿、紀卿等と同じ國近き隣の人にして、由來ること尚し」との勅命を受ける。〔紀〕は続けて記録する。「是に大連、勅を奉りて、土師連小鳥をして家墓を田身輪邑に作りて葬さしむ。是に由りて大海欣悦びて、自ら黙あること能はずして、韓奴室・兄麻呂・弟麻呂・御倉・針・六口を以て大連に送る。吉備上道の蚊嶋田邑の家人部は、是なり」

以上の話は、表面的には美談めいているが、実のところ室屋

は、紀氏の妻を通して、吉備上道臣氏から土地と人とを奪い取つたのではないのか。だから吉備上道臣を外戚とする星川王の即位は、いろいろな面で大伴氏にとつて厄介だつたのではないか。その点、外戚とてない清寧は、室屋に全面的に依存している存在である。

さて、清寧二年春二月、室屋は諸國に白髮部舍人・白髮部膳夫・白髮部靱負を置く。その動機を、天皇が「子無きことを恨みたまひて」「冀はくは、遺の跡を垂れて、後に觀しめむとなり」と伝えるが、事實はもう少し込み入っているのではないか。〔記〕にも「紀」にも清寧の妃は一人も記載されていない。単なる記録漏れにしては徹底している。もし記録漏れではなく、真実天皇たるべき人の妃が絶無であるとすれば、異常と言うほかない。但し清寧は「生まれましながら白髮」という異形の人でもあつた。おそらく結婚も不可能な人だつたのではないか。大伴氏がそういう人物を擁立したことに、留意したい。

白髮部の設置は、清寧が直系の世継ぎを諦めたという確認でもあつた。いわば大伴氏が天皇に引導を渡したのである。そしてこの白髮部設置の直後に次の記事が置かれている。

〔冬十一月に、大嘗供奉る料に依りて、播磨國に遣せる司、山部連の先祖伊豫久目部小楠、赤石郡の縮見屯倉首忍海、造細目が新室にして、市邊押羽皇子の子億計・弘計を見でつ〕この報せに清寧は「愕然き驚嘆きたまひて、良しく愴懷して曰はく「懿きかな、悦しきかな。天、溥きなる愛を垂れて、賜ふに両の児を以てせり」と歡喜したという。現在残っている記紀の系譜によれば、清寧とオケ命・ヨケ命とはハトコに当たる。彼

らは互いに葛城氏に繋がり、保護者を雄略に殺されたこともかえって清寧には親近感あるいは同情があったことだろう。子が無く、これからも無いことを認識させられた直後の後継者の出現に、清寧は感動したのである。

しかし、この突然の後継者は、少々きな臭い。

大体、彼らの名前からして、オケ・ヲケと兄・弟の意味しか持たない。名前が無いのと同じようなものである。オケの更名が嶋稚子又は大石尊(大脚、大為とも筆記)、ヲケの更名が来目稚子と全くパツとしないのである。『記』では更名は全てカットされている。その母方の系譜も、『紀』にのみ葦田宿禰の子蟻臣の女美媛の子とあるだけで、素性もどうも怪しいのである。怪しいと言えば、彼らの発見者もどこか胡散臭い。億計王らの名乗りの場面は、来目部小楯が、絃を撫ぎ、燭台を灯しに来た兄弟に「起ちて儻へ」と促し、二人が相譲りてなかなか立ち上がらずにいると、小楯は嘖めて「何為れぞ大だ遅き。速に起ちて儻へ」と命じる。来目部小楯が、兄弟の名告りを誘導している。

久目部の総帥は大伴氏である。ヲケ命の更名が来目稚子と言ったことから、彼の後楯が久目部乃至大伴氏なのは明白である。清寧は「大臣・大連と、策を禁中に定」めた。

だが、発見者は大伴氏の息のかかった来目部の者であり、彼らを容認した天皇が、大伴氏の擁立した清寧なのである。大臣平群臣真鳥は、不満という以上に憤懣やるかたなかったであろう。しかし天皇が率先して「嗣とせむ」と宣言しているのでは、致し方ない。つまり大伴氏は、次節に述べるように物部氏と結託して大臣をだしぬき、大連系の天皇の擁立に成功したのである。

但し、大伴氏の切り札であった清寧は、この三年後に亡くなってしまう。

『記』には、ヲケ命と真鳥の子志毘が嬬子大魚を競い合い、平群氏がオケ・ヲケ命兄弟の急襲を受けて亡びる様子が、次のように描かれる。

「凡そ朝廷の人等も、且は朝廷に参赴き、晝は志毘の門に集へり。亦今は志毘必ず寝つらむ。亦其の門に人無けむ。故、今に非ざれば謀るべきこと難けむ。」とのりたまひて、即ち軍を興して志毘の臣の家を圍みて、乃ち殺したまひき。是に二柱の王子等、各天の下を相譲りたまひき。

簡潔な表現ながら、ここには朝廷における平群氏の権勢が超絶的である事、突然出現した皇位請求者に懐疑的かつ対立的なその権勢を打倒しない限り、兄弟の即位が実現しなかつた事が、述べられている。志毘を倒して後初めて、皇位を巡る兄弟の譲り合いが記されているのである。

『紀』では、平群氏滅亡は、オケ命の子武烈の代まで先送りされているが、いっそう大伴氏の干渉が露骨になっていて、平群臣真鳥と志毘の父子は、大伴金村に討たれる。

清寧の崩御の後、兄弟はすぐ即位することなく、彼らの叔母とも姉とも伝えられる飯豊青皇女(忍海郎女)が、葛城忍海角刺宮に朝廷を開いた。しかし僅か一年足らずで彼女も崩御する。彼女の即位は、兄弟が位を譲り合った為とされるが、実のところは、おそらく平群氏の根強い抵抗があったからであろう。衆目一致するところの、履中系最後の血筋であった飯豊皇女の死。もはや平群氏の強硬姿勢を裏付ける何物も、残ってはいな

かった。

かくして、まずヲケ命が即位した。来目部の小楯は山部連を賜り、山官となり、吉備臣を副官として、山守部を民とした。山守部はもともと吉備臣の配下にあつたのを、新しい天皇によつて改めて大伴氏系列下に置いたのである。大伴氏は再び吉備氏の領域を冒したと言えよう。

3 仁賢天皇の成立

ヲケ命の在位は僅かに三年であつた。

彼は皇族の難波王を皇后としただけで、他の妃の名は一名も記されていない。子も無かつたらしい。そして奇怪なことに、オケ命即位の二年目に、難波王は不敬罪に当たることを恐れて自殺したと言う。皇太子時代のオケ命を、時の皇后が立つたまま、瓜を剝く為の小刀を与え、また酒を酌んで喚んだことが、果たして不敬罪に当たるだろうか。オケ命が即位して一年も立つてから、過去を悔やんで（誅せられむことを恐りて自ら死せましぬ）とは、いかにも不可解である。オケ命は、清寧・飯豊青尊・顕宗（ヲケ命）の三代に皇太子であり続けた。それは彼の意志でもあつた。これは、皇極・孝徳・斉明の三代に、やはり自らの意志で皇太子であり続けた中大兄皇子（天智天皇）を連想させる。中大兄皇子の場合、蘇我氏暗殺という異常な局面や新羅征伐という逼迫した状況を克服する為の必須の選択であつた。オケ命の場合も、政治的に厳しい状況に立っていたのではないか。

「来目稚子」という別名を持っている弟が、いかにも大伴氏と近かつたのに比べ、兄はどうも物部氏と近かつた節がある。

いや兄弟共に、というべきかもしれない。なぜなら、発見の折りのヲケ命の名乗りの歌のなかに、「餌香市」「石上振の神櫃」（紀）、「物部の我が夫子の取り佩ける大刀」（記）と、いずれも物部氏にまつわる名称が読み込まれているからである。また兄弟に最後まで奉仕した日下部吾田彦とは、狭穂彦の子孫であると共に雄略の時代に物部目大連の配下に組み込まれた氏族である。市邊押羽皇子を擁立した物部氏の息は、この市邊押羽皇子の子と称する兄弟の周囲にも濃くたちこめていた。前節の大伴氏と物部氏とが結託したと述べたのは、その辺りを指したのである。

オケ命が、殊更物部氏に近かつたと思われるのは、彼の妻子が全員丸邇氏系だからである。彼は春日大郎女、あの物部目大連が後見した雄略の皇女を皇后として、一男六女を生む。又、和珥臣日爪の女糠君娘との間に一女を生む。皇后の祖父は和珥臣深目であるから、オケ命の地盤は全て丸邇氏であり、従つて反正と同様物部氏の後楯があつたことを、物語る。事実、彼は石上廣高宮に朝廷を開き、三年春二月に石上上部舎人を身辺に置き、対照的に四年五月の（的）臣蚊嶋、罪有りて皆獄に下りて死ぬ」という記事が語るように、もともと彼の父祖の縁戚であつたはずの葛城ソツヒコの子孫を遠ざけている。彼は葛城氏系の忘れ形見というよりも、物部氏の申し子なのである。彼は清寧によつて皇太子とされたにも関わらず、清寧の死後弟に即位を譲り、弟の皇太子という異例の地位に甘んじたのは、「来目稚子」として弟を擁立している大伴氏の勢威を、懼つた為ではなかつたか。

オケ命は在位六年で崩御する。その子武烈が、物部影媛を娶ろうとしたという武烈紀の記事は、オケ命が在った状況からも、必然性がある。しかし、思いがけず影媛は、平群真鳥宿禰の男志毘と通じてしまった。ここでめでたく平群氏と物部氏とが連帯してしまえば大伴氏にとつての脅威である。大伴金村はすぐに武烈と結託して、平群氏を襲った。物部氏は、かつて軽太子を穴穗皇子に差し出した時のように、また市邊押羽皇子を雄略に殺された時のように、情勢を窺って事態を黙認したようである。哀れなのは影媛である。彼女は自ら次のように歌った。

石の上 布留を過ぎて

薦枕 高橋過ぎ 物多に

春日 春日を過ぎ 妻隠る 小佐保を過ぎ

玉笥には 飯さへ盛り 玉筥に 水さへ盛り

泣き沾ち行くも 影媛あはれ

この歌の中には、春日の丸邇部の地名が次々と読み込まれており、その地をさまざま影媛の姿を通して、春日の地と物部氏との密接な関係を再確認できるのである。

影媛に逃げられた武烈の妃については、結局「春日娘子を立てて皇后とす」という記事があるだけで、子も無かつたらしい。この皇后は割注に「未だ娘子の父を詳にせず」とある程で、素性が確かではない。只春日と冠しているから、これも丸邇氏系の女と見れる。

平群氏を亡ぼした後、武烈の朝廷での大伴氏の勢力は甚大であつたらう。そして武烈が後継者を持たずに崩御した後、大伴金村は、かつて清寧の後に胡散臭いオケ・ヲケ命を連れて来た

ように、雄略の母と遠縁に当たるというヲホド王（継体）なる者を連れて来る。

4 継体朝の実像

継体は丸邇部の世界（大和・山城を中心に近江・美濃・尾張・若狭・越前）から大和に入った。丸邇氏や尾張氏との結びつきについては、既に諸論文に述べられている。

継体の系譜を見ると、三尾君系の妃と子については、記紀は珍しい程一致している。

ワカヒメの子が大郎（子）、ヤマトヒメの子が大郎女と、各々長男長女を指す名がつけられていることから、これら三尾君一族は、継体にとつて専ら私的な家族であつたのであろう。愛子を意味する「マロコ」と名づけられた皇子の存在も、それを裏付ける。継体の父彦主人王は母振媛を（近江國の高嶋郡の三尾の別業より、使いを遣して、三國の坂中井に聘へて、納れて妃としたまふ）とあるから、継体はもともとが三尾の豪族、ここに彼の地盤があつたのである。『紀』に尾張連女を「元の妃」、仁賢皇女を皇后と記すが、これら有力な背景を持ち、後に各々天皇の母となつた妃達は、いわば公的な立場での妃だつたと思われる。三尾の一豪族だつたヲホド王が、継体天皇となり得たのは、これらの妃の後見人である尾張氏や丸邇氏、及び大連大伴氏の援助があつて初めて可能だったのである。

継体の崩年は諸資料により異説がある。『紀』に引用された百濟本紀の所伝二十五年辛亥は、『上宮聖徳法王帝説』の欽明即位を辛亥とする記事と矛盾する。安閑・宣化の存在が消滅してしまうからである。また百濟本紀には（天皇・太子・皇子相共に

死歿」という不明な記事があることから、継体没後の争乱期を想定する説があり、継体の皇子の安閑・宣化グループと欽明のグループとが対立、朝廷が一時並立したのではないかとする。

継体と共に死んだ「太子」とは、三尾君大郎子ではなかったか。ちやうど和邇氏出自の応神が、和邇氏矢河枝比売の子宇治若郎子を太子としたように、そして応神の死後太子は尾張氏中比売の子仁徳と絡む不可解な状況で自殺したように、三尾の豪族だった継体の正統の長男は、我が子諸共に暗殺されたのである。それがどの一派であったかは知る由もないが、継体の基盤は安閑が継いだことは確かだ。安閑は尾張氏系の年長の皇子であり、皇后は和邇深目の女と仁賢天皇のあいだにできた春日山田皇女である。大伴氏も継体擁立以来の団結をこれら二氏と続けることで、大連の地位を不動のものにしたにちがいない。さらに、このグループの団結が物部氏を疎外しだした形跡がある。それは次の事件によって暗示される。盧城部連枳菟諭の女幡媛が物部尾興の珠を盗み皇后に献上した。事が露頭し、枳菟諭は屯倉を献上して娘の罪を贖った。さらに尾興が「事の己に由ることを愕れ、屯倉を献まつた」という。被害者の尾興までもが、迷惑料の形で屯倉を献上しなければならないとは気の毒であるが、事件の背景を考えるとどうも裏がありそうである。盧城部連は尾張氏の流れであり、尾張系天皇と和邇氏系皇后の両方に近い。しかも盧城部連枳菟諭の男吾田彦は、清寧の同母妹栲幡皇女の乳人であった。清寧の後楯の大伴氏と枳菟諭とは親しい間柄だったと思える。尾興の賠償行為は自発的というより、大伴氏の差し金だったのでないか。大伴氏の弱みは後宮

に参入できないことであつた。同盟者であると共に競争相手である丸邇氏と物部氏とは、両者共に後宮と直接の繋がりを保持していた。春日山田皇后と夫との強い絆は『紀』に描かれている。そして物部麤鹿火は宅媛を納れている。だから尾興への圧力は、間接的には有力な妃である宅媛の周辺を牽制する狙いがあつたのかも知れない。欽明朝で大伴金村が失脚し物部尾興が大連として健在だったことと照応すると、その辺りの事情が窺い知れるのである。つまり、かつて大伴が物部と組んで平群を追い落としたように、今度は物部と蘇我が連帯して、大伴は追放されたのではないか。尾興の女と大臣蘇我稲目の男馬子が婚し、蝦夷が生まれる頃と、その時期は一致する。

安閑と宣化とは同母の兄弟であるが、彼らの政治的立場には微妙な差がある。宣化朝で初めて蘇我稲目が大臣として台頭している。宣化の皇后は継体皇后と同じく仁賢の女、橘仲命であり、その女石日売命が欽明の皇后となつた。即ち宣化系と欽明系の利害は一致するから、彼らは同盟しむしろ安閑系のグループが孤立したのではないだろうか。つまり丸邇氏の中で皇族系と日爪臣系とが競合し、後者の勢力には侮り難いものがあったらしい。それは宣化の死後欽明が、「山田皇后明らかに百揆に閑ひたまえり。請ふ、就でて決めよ」と申し出たことに端的に現れている。また自らが即位した後、皇太后位を母(継体妃)や叔母(宣化妃)にはなく、この山田皇后に贈っている。この欽明の遠慮は、日爪臣系丸邇氏の勢力が強くさらに大伴氏がその背後にあつたからではないだろうか。あるいは、宣化の死後なお「山田皇后」が存在したということは、橘仲命が宣化の

皇后として登場する場面がないということであり、宣化の天皇としての存在感すら薄い。仁賢記の子女の名の中に橘仲命の名は示されず、宣化記で突如「天皇、意禰天皇の御子橘の仲比売命を娶して」と紹介されるという軽い扱いになっている。おそらく記紀の以前に編まれた蘇我氏と聖徳太子とによる『国記』では、継体の正統として欽明天皇が意識されており、安閑や宣化を正式の天皇とは認知していなかったのではないか。

但し、皇統が蘇我氏系から離れて、舒明以後の時代に至ると、舒明の母の父を尊ぶ気運も生じ、宣化を天皇の列に加える同意が成立したのである。石日売命の父が天皇となれば、その兄安閑も、こちらは短い間ながら欽明と対立競合の実績もあり、天皇として位置づける必然性が出てきたと思われる。そんな説を許す程に、『記』『紀』の中の安閑・宣化の痕跡は希薄であり、一人山田皇后の姿が強調されている。もし先に述べたように、山田皇后の後援として丸邇氏・尾張氏に加えて大伴氏の同盟があり、物部氏の疎外があったとするなら、宣化・欽明の後援として台頭した蘇我氏と物部氏の縁戚関係は、大伴氏を徐々に駆逐するものとして成長していったであろう。新羅征伐の是非を論じて、物部大連尾輿は大伴金村の過去の政策を非難し、追い詰められた金村は住吉の宅に蟄居してしまう。欽明天皇の待遇は厚かったが、政治的には大伴氏は失脚してしまう。允恭から雄略の時代にかけて興隆し、清寧・顕宗・武烈・継体等の実質的な擁立者であった大伴氏の、いわばキングメーカーとしての栄華の時代は、ここに終わりを告げた。

5 蘇我氏から息長氏へ

大伴氏に代わって朝廷を動かした蘇我氏は、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・舒明・皇極の七代に強い影響力を及ぼす。しかし、その影響力は必ずしも一貫して伸長したわけではない。それは欽明紀と敏達紀に現れる空気の微妙な違いによって示される。

欽明は元の妃として宣化の三人の女を納めた。宣化系への懐柔策である。しかし大臣蘇我稻目宿禰の女堅鹽媛は、欽明妃として七男六女を生み、その姉妹小姉君も四男一女を生んでいる。宣化方の女三人が五人の子を生んだ以上に、稻目の女二人が十八人の子を生んだことから、欽明と蘇我氏との強い絆が窺える。従って宣化皇女石日売命の子である敏達と父の仲は、親密とは言い難かった。欽明の危篤の際、皇太子である敏達は「外に向きて在りませず」、そのため「驛馬せて召」さねばならなかった。欽明は息子の手を取って遺言する。「新羅を討て」と。又「夫婦と造りて惟舊日の如くならば、死るとも恨むこと無けむ」と。「惟舊日の如くならば」の言葉は、欽明が蘇我氏への配慮を言外に託したとされる。しかし、生の最後の瞬間まで心は蘇我氏の上にあつた父とは、敏達は全く異なつた立場にいた。敏達の皇后廣媛は息長氏、妃は春日臣仲君女等、全て敏達の母と同じ系列である。敏達紀に言う。「天皇、仏法を信じたまはずして、文史を愛みたまふ」。ここには、父欽明の政策への反撥が伺える。大連物部弓削守屋と大臣蘇我馬子宿禰が仏教の受容を巡って対立した時、敏達は物部氏を支持し、「仏法を断めよ」と詔して、寺の塔を研り火をかけて焼滅する事さえしている。蘇我馬子はこの天皇の下で耐え抜き、廣姫の死後、堅鹽媛の子（後

の推古天皇)を立后させることに成功する。敏達朝の反蘇我氏体制は崩れ、再び仏教を巡る物部氏と蘇我氏との武力衝突の果てに、前者が殆ど壊滅すると蘇我氏の独裁が確立。敏達の死後皇太子の日子人(廣姫の子)は棚上げされて、用明・崇峻・推古のいずれも稲目の孫三人が、天皇となった。

但し、推古女帝には蘇我氏一族であるという自覚よりも、欽明皇女すなわち「皇室」の正統としての自負が勝っていたようである。推古の夫の敏達も欽明の皇子でありまた蘇我氏に反撥する天皇であった。この夫との間に二男五女を儲けた推古には、夫の影響が少なくなかったのではないか。蘇我馬子の葛城の地没収の策略を毅然として撥ねつけ、自らの後継者としては、皇太子であった聖徳太子の子で馬子の孫の山辺皇子ではなく、敏達と先の皇后廣姫の孫田村皇子(舒明天皇)を指名する。かくして、蘇我氏系天皇の血脈は断たれ、息長氏系天皇が出現する。

こうして允恭から天武の父舒明に至る徑路を『紀』の中に追っていくと、この時期天皇位とは、いかにも不確実なものだったようである。允恭の行なつた探湯^{たんとう}による姓名の真偽調査とは、制度再編成に伴う一種恐怖政治であつたと言えよう。彼の後桶である息長氏出身の皇后に属する忍坂部が刑部と表記されるどころにも、允恭の支配がいかにも強圧的であつたかが窺われる。

允恭の子雄略は、対立する葛城氏系の者だけでなく、全ての皇位継承者就く同腹の兄弟まで血祭に挙げて即位した。『紀』には暴虐な君主としての雄略の側面が強調されている。允恭・雄略の父子の時代はまさに内乱期であつた。が同時に新系列の王朝

の勃興期でもあつた。雄略の死後早くも、大伴氏が皇位継承に介入し、清寧・顕宗・仁賢・武烈等、甚だ係累の怪しげな短期間の天皇達が擁立された。継体の即位は三十六年の月日を費やし、彼の子欽明の即位までの間、安閑・宣化の即位は殆ど宙に浮いた存在であつた。欽明以後舒明・皇極に至る間は、蘇我氏の恣意的な操作が皇位を決定した。

天武にとつての近代史は、以上のように曖昧であり、かつ天武には承服し難いものであつた。過去の朝廷を記録した殆ど唯一の「国記」は、蘇我蝦夷が半ば灰にし、残つた記録も蘇我氏の潤色の濃いものであつた。大臣蘇我氏以前に蘇我氏を凌ぎ、あるいは天皇家をも凌いだ大連としての物部氏と大伴氏の記録を、天武は無視するわけにはいかない。しかしそこに記された事を全て肯定することは、天皇の矜りが許さない。(朕聞く、諸家の賣る帝紀及び本辭、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずば未だ幾年をも經ずして其の旨滅びなむとす。斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟れ、帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽りを削り實を定めて、後葉に流へむと欲ふ)

天武のこの決意が、「古事記」の構想を決定していくのである。

第三章 皇統譜はいかに創られたか

1 允恭の周辺

天武の「構想」の起点となつたのは、まず息長氏所生では最初の大后となつた忍坂大中比売の夫允恭である。允恭こそは、息長氏系譜を遡つて到達する最古の天皇である。允恭の実在は、

の理由の一つとして允恭が大日下王より年長だとしている。しかし『記』中巻に登場する髪長比売の夫の大雀命は未だ太子であるが、下巻に登場する仁徳は既に天皇で皇后の嫉妬に悩まされている。但し皇后のライバルは丸瀧氏や吉備氏の女達であつて、日向の髪長比売は除外されている。これでいくと、太子妃として娶つた髪長比売は仁徳の晩年に、即ち皇后が四人の子を生んだ後に初めて二人の子を生み、しかもその間皇后の嫉妬から完全に免れていたことになり辻褄が合わない。私見では髪長比売の夫と、石比売の夫で允恭を含め三人の天皇の父とされた仁徳とは、別人ではなかつたかと思う。そして前者即ち髪長比売の夫が、あるいは梁書のいう允恭の父「弥」であつたかも知れない。というのは、『姓氏録』山城國諸蕃秦忌寸の項を、記紀の記事と参照すると甚だ興味深いのである。

そこに記される秦氏の歴史は次のように要約される。

1 応神十四年来朝 物智王と弓月王とが、大和朝津間腋上地を賜ふ。

2 仁徳の代 弓月王の男 普洞王 波陀の姓を賜ふ。今秦字之訓也。

3 雄略の代 秦氏は却略され人数がかつての十分の一まで減つてしまつた。勅命を受けた小子部雷が大隅阿多卑人を率いて、秦氏九十二部一萬八千六百七十人を探し集めて秦公酒に賜つた。酒はこの部氏を統率して養蚕織絹に励み、その貢は岳の如く山の如く朝廷に積まれたので、天皇は秦氏に新たに「禹都万佐」という姓を賜つた

特に2に注目されたい。それは秦氏の姓がもともとは波陀と

号されたことを伝える。ここから連想されるのは、大雀命が髪長比売を迎えた時の歌である。

道の後 古波陀嬢子を 雷の如く 聞えしたども 相枕枕く
道の後 古波陀嬢子は 争はず 寝しくをしども 愛しむ
思ふ

ここで、髪長比売は「古波陀嬢子」と呼ばれているのだが、これは「波陀」の乙女ということではないだろうか。後に推古天皇は蘇我馬子の寿歌に和して、次のように歌つた。

真蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば日向の駒 太刀ならば
呉の真刀

諾しかも 蘇我の子らを 大君の使はすらしき

蘇我の美称が「真蘇我」であるように、波陀の美称は「古波陀」だつたのではないだろうか。すると髪長比売は秦氏の一族であつたことになる。比売の父諸縣君牛の風貌も、どこか渡来人の面影がさしているのである。応神紀は諸縣君牛をこう描く。

数十の麋鹿 巨海に浮びて多に来る 諸縣君牛 角著ける
鹿の皮を以て衣服とす

(海上に鹿の群れが泳ぎ渡つて来るのを応神天皇がご覧になると、それは実は鹿ではなく、鹿の表皮を角を付けたまま生剥ぎにしたのを頭からすつぽり被つて衣服とした人々が、泳いでくるのであつた)

この風体が尋常なものではなく珍しかったからこそ、このように特記されたのであろう。因みに日本の近世まで皮剥ぎの職業を専門としていたのは、主として朝鮮系の人々である

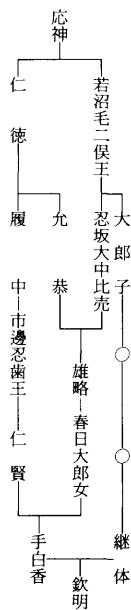
およそ允恭の祖父の時代(即ち、記紀という仲哀や応神に当

たる頃)、倭朝廷は九州の国々との交戦を含む接触が盛んになったのである。応神妃泉比売・仁徳妃髪長比売・履中皇后（はたのひめ）、皇女等、日向系の后妃は応神以後に目立って多くなる。九州土着の各勢力の中でも、多氏の祖先や阿多の単人は早い時期から朝廷に服属したようである。先に挙げた后妃に従って倭へ来た者もあつたであろう。或いは、倭の天皇の先兵として功をたて、多くの渡来人の技術諸共、天皇の倭凱旋に従つた者もいたであろう。彼らはそこで新しい土地を賜り、武力提供の他にも内廷の用等を勤めて出世していったと思われる。その新しい土地は、前述の秦氏の例がそうであつたように、葛城山麓を中心とする一帯であつたようである。朝津間は葛城ソツヒコが新羅の浮人を率いて来た土地であり、また息長帯比売の母は新羅の天日矛の子孫であるが、名を葛城高（かつらぎのたか）額比売（かみひめ）という。この土地と新羅とは縁がある。秦氏も新羅系と目されるから、朝津間周辺には新羅系渡来人の大掛かりな集団があり、そこには雄朝津間宿禰命が允恭天皇へと変貌する機運も基盤も在つたのではないか。

2 応神の創成

實在の確認できる允恭は、皮肉にもその為に、天武の皇統譜の始祖王とはなり得なかつた。雄朝津間宿禰命は帰化系の一豪族であつたし、想像を逞しくすれば、履中のおそらくは庶兄であつた「弥」の子供であつたかと思われる。そこで天武が最初に着手したのは、允恭とそれに先行する履中とを、対立する勢力ではなく統一的存在として捉え直すことであつた。彼らは兄弟とされ、まず彼らの父が「仁徳」として設定された。さらに仁徳と允恭妃の父（杵俣長日子王系譜の若沼毛二俣王）とが

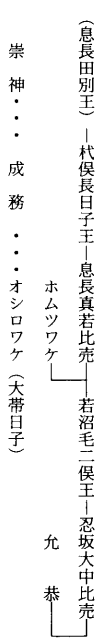
兄弟とされ、二人の父が「応神」として再び設定された。



これで天武の祖先の「杵俣長日子王」系譜は、継体・允恭・履中の何れの天皇とも繋がる統一体になつた。だから応神はいわば始祖王であり、その面影は現在の記紀にも、神話的な誕生や日向からの帰還等として曳航されている。

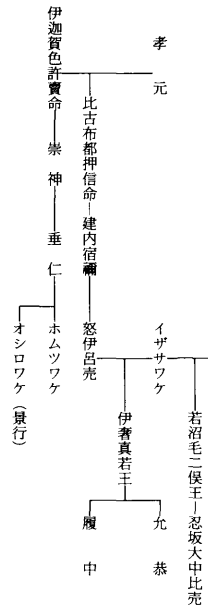
しかし応神もまた始祖王とはなり得なかつた。なぜなら、応神よりも古い時代即ち物部氏系の系図等に記載される崇神は、「初國知らしし天皇」として人口に膾炙していたからである。天武は次の作業にとりかかる。

改めてI図とII図とを並べて見て頂きたい。それを簡略にすると次のようになる。



比古布都押信命——建内宿禰——怒伊呂売——伊耆真若王——イザホワケ
 この二種類の系譜にあるイザサワケ及びホムツワケが、「応神」の原型である。つまり若沼毛二俣王以下がイザサワケ系譜に合併吸収され、子孫を失つたホムツワケは、代わりにオシロワケという兄弟を得て、崇神の孫の位置に収まる。ホムツワケとオシロワケの父としては新たに垂仁が設定された。

(息長田別王) 村俣長日子王—息長真若比売

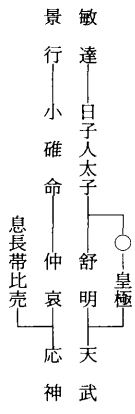


現在の記紀に見れば、垂仁と建内宿禰とは従兄弟で同世代のはずである。しかし二人が『記』の同一の時空に現れることは一度もない。それは武内宿禰が古系譜以来の存在であるのに、垂仁は後世早くても欽明朝頃になって挿入されたからである。垂仁記は専らホムツワケ物語にとられている。また丹波の円野比売が醜さのために入内を拒否された話と、その後のタジマモリと橘の実の挿話は、日向神話のバリエーションである。即ち石長比売を拒否した為に、天皇が不死身であることを逸してしまったというストーリーの焼き直しにすぎない。

崇神の後継者とされた成務乃至倭武天皇は、垂仁の出現によってその位置を追われる。若帯日子命はその名の連想からか大帯日子命の子成務として、また倭武天皇は同じく大帯日子命の子小碓命として、新たに配置された。その時に倭武天皇の皇子若建王と飯野真黒比売以下の系譜も、また彼女の実家の村俣長日子王系譜即ち息長真若比売以下も、そのまま小碓命の下に付けてしまった。この為に迦具漏比売系譜の矛盾が出現したのである。

これは単なる不注意な操作というより、天武の主幹系譜尊重

の意欲と理解され、また天武自身の出自にも関係している。天武と応神の系譜を並べてみると、二つは構造的に対称と言つてよい程相似している。各々父母共に天皇であり、祖父は皇太子である。



即ち、天武の父の舒明は天皇の子ではない。舒明の父は蘇我氏の強圧に押され早死した日子人太子である。天皇の子でないのに即位した例は希有であり、それは天皇の正統性と權威とを冒す。天武としては、「祖父は充分資格があったのに、悲運だった」という思いがあったのではないか。祖先の權威ひいては自らの權威の高揚の為に、早死しなかつたならば確実に天皇になつたであろう偉大な皇太子が求められた。故に応神の祖父には天皇であつた成務ではなく、小碓命が採用されたのだ。そして小碓命の形象は増幅され倭建命化された。即ち倭武天皇の系譜や伝承ごと吸収して、「古事記」の中の最大の人物として造型されたのである。もとの倭武天皇の存在は、迦具漏比売の末裔として登場する忍熊王を通して、応神の敵役を振り当てられ、否定消却された。

さらに母天皇である息長帯比売命も皇極も、共に新羅征伐を敢行している。天武は母后皇極の事績を正当化するために、先例となる息長帯比売の事績を挿入したのではないか。こうして敏達から天武までの歴史をまるで鏡に映すようにし

て、景行から応神への系譜が造られ、応神と「初國知らしし天皇」崇神とは、結び付いたのである。

敏達は母方から尾張氏の血を、また父方の祖母から丸邇氏の血を受け継ぎ、ここに比呂比売による息長氏の血を交えて天武に至っている。天武の内にはこれら三つの血統が渾然一体となっていて、やがてそれは天武の創造した皇統譜のモチーフとして、各々その高貴性を主張するのであるが、特に応神の両親の系譜には集中的に現れている。

「応神は「播磨風土記」の中に煩瑣に引用されるように、播磨國と深い関係がある。応神の系譜には他に丹波の地名が多く登場する。この背景には、天武の即位時、播磨が悠紀國丹波が主基國として選ばれた事情が絡んでいる。即ち播磨・丹波の丸邇氏と息長氏とが、天武の一族の経済的な基盤であったのだろう。両親から丸邇氏と息長氏の血を濃く受け、尾張氏系の中比売を正妃とする応神は、血統と環境において、天武と実に相似している。

こうして応神と天武とを比較すると、ふたりは各々新しい皇統譜の頂点に位置していることが明らかに。つまり天武も天智系を廃止して即位した意味では始祖王のひとりであり、彼の自負は彼の祖先の系譜へ逆照射して、自らの血統の權威を高めるべく人為的な皇統譜を形成したのであった。

3 穂穂出見尊から神武天皇へ

天武の「構想」は、允恭から始まり応神を創設して「初國知らしし天皇」崇拝に繋がった。だがそれで終わりになつたのではなかつた。天武は物部氏主導の初代天皇崇神を克服し、自ら

の系譜を包摂する超越的な「初國知らしし天皇」を欲した。それが神武である。

神武天皇はいわば複合名称であり、その成立過程は「記」の構想を凝縮している。

天孫降臨から神武の倭入りまでの系譜は、二ニギ尊―日子ホホデミ命―ナギサフキアヘズ命―神武と四代が記される。そして「紀」によれば、四代目の神武の亦名は二代目と同じホホデミ（穂穂出見）命である。つまり現「古事記」ではホホデミは山幸彦であるが、それ以前に神武がホホデミであった段階があったと思われる。

「記」に日向神話として採録されている計十種類の伝承を整理すると、それはまず神吾田津姫と二ニギ尊とを主人公とする吾田隼人の祖先（ホスセリ尊）伝承である。その弟ホホデミが、阿多小椅君の妹阿比良比売を娶り、タギシミミ命を儲ける。これが第一段階。

第一段階の神吾田津姫の神話が成立したのは、おそらく雄略の時代に遡れるだろう。

清寧紀の「大泊瀬天皇を丹比高鷲原陵に葬りまつる。時に隼人晝夜陵の側に哀號ぶ。食を與へども喫はず。七日にして死ぬ。

有司、墓を陵の北に造りて、禮を以て葬す」とある。記記によれば、崇神の皇子倭根子命の甲いに初めて人垣が立てられたが、次の垂仁皇后の葬式には埴師氏により埴輪が作られ、人垣の代わりにしたという。だから雄略の時代には人垣は風習としては既に廃れていたはずである。陵の側に泣き崩れる隼人に「食を與へ」とあるのが、それを裏付けている。しかし隼人等は「喫

はず。七日にして死ぬ。彼らの雄略を失ったことへの絶望はこれ程激しく、また当時としては異様な殉死を選んだ隼人を公の有司が〔禮を以て〕雄略陵の側に埋葬したのであるから、雄略と隼人の繋がりが、尋常なものではなかったことを示す。この緊密な時代にこそ、吾田隼人の祖先伝承は、天皇家の祖先の兄弟として採用される機会を持ち得たと思われる。

次に雄略の皇后若日下王の存在に注目したい。皇后は雄略の求婚を受け入れる理由として「日に背きて幸でまししこと恐し」と語っている。この言葉はホホデミ（神武）と共に東征して紀國で討ち死にした五瀬命の「吾は日神の御子と為て、日に向かひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今者より行き廻りて、背に日を負ひて撃たむ」と呼応している。そして皇后の母髪長比売や祖父の住んでいた日向國諸県郡に在る霧島は、まさに「日向神話」結縁の地である。霧島山は諸県郡と大隅の曾於郡に跨がる山である。その峯は東西二峰に分かれ、「紀』にいう「日向の襲の高千穂の楳日二上峰」（一書の四）にふさわしい。『続日本紀』延暦七年三月四日戌時に〔當大隅國曾於郡會乃峯上 火炎代熾 響如雷動 及亥時 火光稍止唯見黒烟 然後雨沙 峯下五六里 沙石委積可二尺 其色黒焉〕と霧島大噴火の記録が載っている。現在その峯の一つが高千穂峯であり、その向かい側に韓国岳がある。聖なる高千穂の神話あるいは度々の噴火の際の畏怖の対象である神さびた光景。それらは諸県牛君の孫に当たる若日下王の記憶にも届いていたであろう。皇后の記憶の中で、高千穂に天降った日の御子（ホノニニギ）伝承と、噴火の炎の中から生まれた火の御子（ホホデミ）

の神話と、どちらがより古いものであったのだろうか。

ところが、現『記』によれば、ホホデミは吾田の女を捨て、大物主の女イスケヨリヒメを大后として迎え、その子神沼河耳命と神八井耳命（多氏祖）とが、タギシミミ命を殺している。

これが第二段階。つまり天皇の始祖の子の位置を、吾田隼人の祖は多氏の祖に取って代わられている。現在の鹿島神宮内には木花佐久夜比売が祭られており、おそらく神吾田津姫の亦名を付け加えたのは、この第二段階であつたのだろう。吾田神話消却の意図による。また現在の三島神社の祭神は大山祇神と鴨建祇で、これはホホデミの妻の父と、ニニギの妻の父である。現在の仏壇等でも、一家の妻の祖先と母の祖先を同時に祭る習慣が見られるが、ニニギとホホデミが親子であれば、ホホデミ（神武）の立場から見ればこれら二神は、まさに妻の父と母の父であつて符号する。つまりここには、まだホノニニギとホホデミ（神武）の間に山幸彦とウガヤフキアヘズの入る余地はないことになる。

第三段階になって、山幸彦とウガヤフキアヘズは付け加えられた。そしてこの系図は、前説で見た天武の構想の核心である景行から允恭までの系譜と、対称的なのである。

景行 — 小碓命 — 仲哀 — 応神 — 仁德 — 允恭
倭比売

スサノヲーオシホミーホノニニギーホホデミーフキアヘズーホホデミ
天照大神 (山幸彦) (神武)

小碓命は景行の子であるが、また物語において姨の倭比売命の子でもある。なぜなら父天皇の命令に自分の死を予感して絶望

する小碓命に、倭比売命は励ましと庇護とを与え、その危機を救うからである。また『紀』の異文は、オシホミが天照大神の子であったり、スサノヲの子であったりと不安定な性格を示している。

そして倭比売命が与えた草那藝劍くさなぶつけんによって、小碓命はスサノヲの後継者なのである。

応神と山幸彦とは対応する。応神は母方の祖先に新羅の皇子を持つが、山幸彦の挿話は新羅の脱解王や文武王の故事など、竜王に関する話によく似ている。『三国遺事』の中の神文王が海龍王から授かった竹の笛「万波息笛」は、風雨波浪を調節する呪能力を持ち、ホホデミが豊玉比売の父の海神から授かった干満二珠に比定される。また、憲康王の代、東海竜王の子処容郎が王政を補佐し、歌舞を以て仕え、疫神を感服させて退散させる等の功績を立て、後世まで一種の祓いの祭儀の主神とされていたという。この伝承は、海幸彦が弟に降伏して、「僕は今より以後は汝命いまはなつとの昼夜の守護人まもりと為りて仕え奉らむ」とまをしき。故。今に至るまで其の溺れし時の種々の態、絶えず仕え奉るなり」と、まさに対応する。また応神の妃矢河枝比売への求婚と、山幸彦の豊玉比売との出会いの文章は、殆ど同一である。つまり天武は、景行から允恭までの系譜に対応させて、また允恭の事蹟をホホデミに反映させて、神武天皇を創出したのである。但しそれは、日向神話の第二段階である多氏所有の伝承に、新羅種の伝承を付け加えて造り出したものであった。

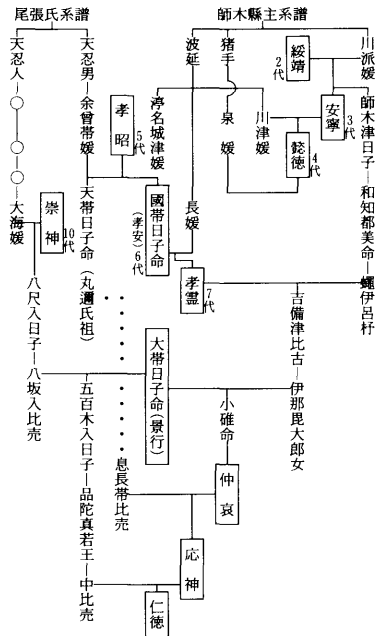
応神と神武を繋ぐ天皇の成立は、景行の二人の妃即ち尾張氏

系の八坂入比売と針間伊那毘大郎女の系譜に関わっている。つまり冒頭「序」で触れた伊那毘大郎女と景行の世代格差について、次のように説明できる。

『記』に記された伊那毘大郎女の系譜は、孝霊妃蠅伊呂杵を経て安寧と師木縣主波延の女川津媛まで遡れる。この系譜では蠅伊呂杵の父は反正と同じ宮に住んだという伝承を持ち、姉の蠅伊呂泥は亦名に意富夜麻登久邇阿禮比売命という特別な名を与えられている。そして『紀』の一書で補足すると、師木縣主波延の女は安寧妃・孝昭妃・孝安妃になり、波延の妹は綏靖妃、波延の弟猪手の女は懿徳妃というように、神武に続く天皇をほぼ網羅している。波延とその妹の曾孫が孝霊と蠅伊呂杵であり、その子が伊那毘大郎女の父である。

現在の記紀のように、懿徳と孝昭を親子と捉えると、師木縣主系譜は迦具漏比売系譜以上に矛盾したものになる。但し、孝昭妃は尾張氏系譜では天忍男命系の余曾帯媛あるいは尾張連祖余曾多本毘売であった、師木縣主系譜とは別伝の天皇の可能性がある。つまり波延は孫の懿徳の妃を弟の女に占められたが、女婿の尾張系孝昭を立てることで、自らも天皇の外戚の座を取り戻したとも考えられる。

孝昭妃としての余曾帯媛の系図は崇神妃大海媛に繋がり、景行妃八坂入比売へと続く。即ち、孝昭妃の二通りの伝承を接点として尾張氏系譜と師木縣主系譜とを繋ぐと、結局景行の二人の妃伊那毘大郎女と八坂入比売とを結ぶ円環となる。この系譜は丸邇氏系譜を取り込み、応神と中比売命とを結び、仁徳天皇を生み出して、そこで忽然として消えている。



この円環の帰結が応神ではなく仁徳であるということに、注目したい。それは景行から応神までを、皇統譜の起点とした天武の構想と微妙にずれているからである。

私見では、応神は天武の創出した天皇であるが、仁徳は実在のモデル乃至は多安萬侶が実在と信じたモデルがいたからだと、思う。「古事記」の「序」にはこう書かれている「番仁岐命初めて高千嶺に降り、神倭天皇、秋津島に経歴したまひき。(略)即ち夢に覺りて神祇を敬ひたまひき。所以に賢后と稱す。烟を望みて黎元を撫でたまひき。今に聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制め、姓を正し氏を撰びて、遠飛鳥に勧めたまひき」つまり日向神話の内から多氏の所有するホノニギとホホデミ(神武)の二人だけを選びだしているように、多くの天皇の中から特に選び出したのが崇神・仁徳・成務・允恭の四人なのである。そして仁徳以外の三人の功績は、いずれも為

政治上重要な制度に関わっている。彼らは恐らく一般的に、少なくとも多氏にとっては、実在を信じられていた天皇だったのであろう。神武から数えて二代目から四代目までは、短命の天皇であり旧辭を持たないこと等から、後世に架上されたのではないかという説は、早くからあった。また成務や允恭も「本紀」の部分が高いことから、架空性をしばしば疑われている。しかしこれはむしろ逆立ちした発想であって、歴史的な事実は微々たる痕跡しか残さないことはあっても、人の創造と創作は幾らでも膨らむことができることを見落としていると思う。

尚、師木縣主系譜と尾張氏系譜は一系とされて懿徳と孝昭が繋がれ、さらに崇神の祖父の孝元と孝靈とが繋がれて、現記紀の皇統譜は完成された。

結び

神武の中には、神話的には応神が反映しており、歴史的には允恭の時代が投影している。

允恭が即位できたのは、妻大中比売が春日や忍坂一帯の名家の出身だった為であり、新羅の後押しもあったからであろうが、それ以上に旧勢力の葛城氏との対立抗争を、武力で克服してきたからである。その辺りの事情は、現記紀の「神話」の中に投影されている。出雲制圧あるいは葦原中国言向けの形をとる所謂「国譲り」神話は、実際には允恭の忠節な武民であった多氏の神「建御雷」が、葛城の神「事代主」を追い詰めて、土地の支配権乃至祭司権を譲り受けたことを物語っている。「高天原」対「葦原中国」という壮大な結構は、所詮舞台の書き割りであ

つて、その前では允恭ゆかりの氏族の神々が活躍しているにすぎない。神武記の構成には、允恭即位の周辺を対照すると、そのバリエーションであると思われる記事が散りばめられている。神武の倭征服は、高倉下（尾張氏）・建御雷（多氏）・布都御魂（物部氏）・ニギハヤヒ命（物部氏）・八咫鳥（鴨氏）及び大伴氏系の道臣命と大久米命等の協力によつて達成された。それは允恭に先行する葛城の勢力を打破し、允恭に伴われて倭入りした時の記憶が、核心になっている。

また神武の太后は大久米命によつて推薦されただけではなく、大久米命は神武の代理としてイスケヨリヒメ命に求婚する役まで負っている。この大久米命の上に、大伴室屋の姿が二重映しになってこないだろうか。

允恭紀にいう。「朕、頃美麗き嬢子を得たり。是皇后の母、弟なり。朕が心に異に愛しとおもふ。冀はくは其の名を後葉に傳へむと欲ふこと、奈何に」とのたまひき。室屋連、勅に依せて奏すに可されぬ。則ち諸國造等に科せて、衣通郎姫の為に、藤原部を定む。大久米命の神武記における抜擢は、この室屋の記憶を根としている。

繰り返しになるが、大伴氏における有史時代は、允恭天皇の下の大伴室屋連に始まり、その栄光は雄略と共に始まった。そして允恭の時代とは、ひとり大伴氏にとつただけではなく、多氏にとつても秦氏にとつても鴨氏に取つても、また新しい王朝の始まりだった。

彼らに共通するのは、発祥の地をいずれも九州とすることである。鴨氏の八咫鳥伝承は、彼らの祖先神鴨建八津身が日向か

ら葛城の峯に渡り、さらに山代へ移つたと記す。これは允恭を頂点とする各氏族の、集団移住の軌跡を集約して物語る。但しそれは例えば「騎馬民族」説に見られるような征服の形というより、葛城や山代の先住民との婚姻や祭祀権の譲渡あるいは共通化を通して緩やかに混合していく性質のものであった。仁徳の「烟を望みて黎元を撫でたまひき。今に聖帝と傳ふ」という伝承は、新勢力の側であつた多氏の言葉という点を差し引かねばならないが、九州及び新羅関係の集団に推された雄朝津間皇子宿禰の父祖の功績の一面を伝えていると思われる。

もし彼らが全くの征服者であつたなら、あるいは先住の氏族とは民族的にも異質の者であつたなら、天武は全ての天皇を一系に纏める必要はなかつたはずである。また代俣長日子王系譜という一見皇統譜にとつては微々たる存在を、特に迦具漏比売における矛盾を冒したまま、後生大事に皇統に結び付けて残す必要はさらになかつたはずである。

注

- (1) 例えば開化皇子日子坐王は、山代の在名津比賣との間に三柱、沙本之大闢見戸賣との間に四柱、息長水依比賣との間に五柱、叔母の衰那都比賣との間に三柱合計十五人が列記されているにも関わらず、本文では「凡そ日子坐王の子并せて十一王なり」と総括される。この事情および背景については、拙論「日子坐王と倭建命―古事記の原系譜を求めて―」『三田國文』第十号（昭和六十三年）に詳述したので、参照されたい。

- (2) 前記の他に

「天皇系譜と古事記の構造―潜在する叙事詩―」

『三田國文』第八号（昭和六十二年）

「ふたりの黒媛―「記」「紀」成立史への一視点―」

(3) 日本古典文学大系「古事記 祝詞」岩波書店 二〇五頁

(4) 同右 「風土記」 二六八頁

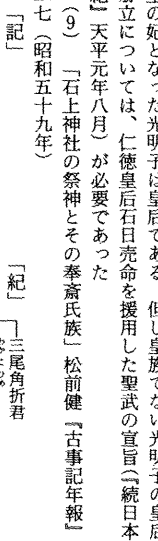
(5) 第二章に關しては、「序」に述べたように、「日本書紀」を中心とする読みなので名称の表記は以下全て「紀」に従う

(6) 母は草香媛皇女。履中紀・雄略即位前紀に「中番姫皇女、更名長田大郎女」とある

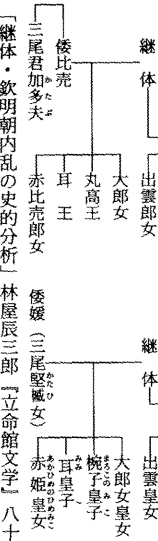
(7) 聖武天皇の母藤原宮子は文武天皇の夫人であり、その妹で聖武天皇の妃となった光明子は皇后である。但し皇族でない光明子の皇后册立については、仁徳皇后石日売命を援用した聖武の宣旨(続日本紀・天平元年八月)が必要であった

(8)・(9) 「石上神社の祭神とその奉斎氏族」松前健『古事記年報』二七(昭和五十九年)

(10) 「記」



(11) 「継体・欽明朝内乱の史的分析」林屋辰三郎『立命館文学』八十八昭和二十七年



(12) 「神に祈誓した上で、手を熱湯などに入れ、ただれた者を邪とする一種の神判」

日本古典文学大系「日本書紀」上四三八頁頭注

(13) 古事記・序

(14) 「日本国家の起源」井上光貞 岩波新書

(15) 拙論「日子坐王と倭建命」補注? 参照

(16) 顯宗天皇紀に次の系譜が見られる

葦田宿禰―蟻臣―夷媛

(17) 「尤恭の出自―森幸一『専修史学』七

(18)・(19)



應神の母息長帯比売の系譜は、丸瀨氏ラケツヒメから始まり父息長宿禰に至る流れの中に、丸瀨と息長の名が換れるように順次現れる。一方「播磨風土記」では、針間伊那毘大郎女(小碓命の母)の父は丸瀨氏彦汝茅で、彼と吉備比売との婚姻を仲立ちしたのは息長命である。これらは丸瀨氏と息長氏の関係について示唆的であり、彼らの同族性を示していると思われる。また欽明記(春日の日爪臣の女糠子郎女を娶して生みませる御子春日山田郎女)の記事は、仁賢記の(丸瀨の日爪臣の女糠子郎女を娶して生みませる御子春日山田郎女)の条が紛れ込んだと思われる。このように天武により近い時代に既に系譜の誤記が見られるのに、遙かに過去の應神の祖先系譜が細緻なのは、それが天武の周辺で架上されたからであろう

(20) 山城國風土記 加茂社の項

(21) 江上波夫氏の提唱

(たじま けいこ)